

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水：時空を超えてすべてをつなぐ 福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校 一年 宇野 誠洋

私は水が大好きです。実は学校に毎日持っていく水筒の中身を水にしたいのだけれど、「お茶は栄養や殺菌効果があつていいのよ。」と母に言われて、無理に持たされます。しかし、走つて登校すると水筒のお茶は泡だらけで、飲んでも口の中がすっきりしません。結局学校の水道水を飲むこととなります。特にスポーツのあとは水に限ります。飲むとからだ中が透き通るような最高の気分になるからです。

先日、探査機「はやぶさ2」の成果で、小惑星リュウグウにも水があつたようだと発表されました。さらに、リュウグウの水と、私たちが飲んでいる地球の水は「生みの親」が同じらしいということに、私は大変驚きました。はるか宇宙の彼方にあるリュウグウとこの目の前の水道水はつながっていたのです。

そして理科で習つたように、そもそも飲み水となる雨は、地球の自然の原理で大昔から循環してきたものであり、この水も大昔の水の生まれ変わりだと言えます。

その水を利用して水道水が作られ、毎日私たちの体の中に水が入ってきます。体のほとんどが水でできているという私たちは人間にとつて、生きるのに欠かせない「水を飲む」という行為は、実ははるか遠い宇宙と、そして恐竜がいた太古の昔とをつなげる、時空を超えてつながる行為だったので！地球上で植物は水を利用して成長し、それを食べて生きる草食動物を肉食動物が食べる、この食物連鎖で自然界は成り立っています。このように命をつなげていくことにおいても、すべての場面で水がないと始まりません。つまり、水は時空を超えてすべての命をつなげるものなのです。

春の訪れを感じる先日、私は現在建設中の小石原川ダムを見学しました。一昨年、九州北部大水害で被災した東峰村に位置する建設現場で、私は二つのことを学びました。

一つは自然保護のために、環境アセスメントを実施し、もともとそこにあつた環境を壊さないために、ていねいに徹底して保護活動をする姿勢です。小石原川ダムの場合、朝倉地方の豊かな自然の中にこれまで住んでいた動物達の保護や、貴重な種類の木を植え替える。そして仕方なく切った木を補償するため新たに植林しつつ野生の鹿に若木を食べられないように一本一本ていねいにカバーを掛けて保護するなど、樹木医も関わる活動を見学してその愛情を実行する行動に感動しました。

もう一つは自然の犠牲や負担、そしてコストを減らすために、現地の自然環境を最大限に生かして工夫する姿勢です。近くにある二つの山を門のように利用するアーチダムや、現地でとれる鉱物を利用したロックフィルダム、そして最終手段としてのコンクリートダムの選択など、ダムの形式を自然に優しい視点で選ぶ工夫がされていることを知り、その知恵の深さに思わずうなりました。

実は見学をする瞬間まで、ダム建設とは人間が生きていく上で欠かせない飲み水の確保のために、必要最低限自然を切り拓き壊すしかない行為だと思ひ込んでいました。ダムは人工物として最大の建造物であり、威風堂々とそびえ立つ恐ろしいくらいの人間の力を見せつける物のように見えていました。しかし事実は違いました。人間と自然が共存するための手段だということに気付きました。それは自然を大切にしつつ自然の一部である人間を生かす方法だと発見しました。この瞬間、ダムと大それた地球と宇宙がつながり一つになって透き通った水になり、静かに私の中に流れてきて、さわやかにからだ中がうるおいいっぱいになる感じがしました。

今日も水道水を飲みます。そしてあの日以来それはいつそうおいしくなりました。だって水を飲むたびに、無数の星々が輝く大宇宙を泳いでいる様な気持ちになれるのですから。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

自然の恵みが世界中に届くことを願って 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 福田 優花

校庭に設置された水道に駆け込み、部活で乾いた喉をよく冷えた水で一気に潤す……。まさに私が生き返る瞬間だ。家でも外でも、蛇口をひねれば、無色透明で安全で、なんの心配もなく水を飲める事が当たり前である私達の暮らし。そんな日常が、実は当たり前ではなかった事を知ったのは、一昨年、初めて家族で東南アジアの国々を訪れた時だった。

「ここのお水は飲んでも大丈夫？」母に確認するまでもなく、ホテルの洗面台には、「飲料水ではありません」との表示。そしてシヨックだったのは、歯を磨く時に口を含む水用のペットボトルまで用意されていた事だ。飲み水の希少性を思い知らされると、ペットボトルの水を購入できない店ばかりになり、結果的に必要以上にリュックサックに溜めこんだ水のせいで、肩が痛くなってしまうのは想定外の思い出だ。同時に、日本のように海に囲まれ、朝晩スコールに見舞われるほどの豊富な水に恵まれた国々で、蛇口の水は飲んではいけないという理不尽な現実を目の当たりにさせられた経験でもあった。

中学生になって、世界の地理を深く学習する中で、東南アジアの多くの国が高温多湿な熱帯雨林気候に属し、年間降水量が多い一方で、実は雨期と乾期の季節変動が大きく、これらの国々では水の管理が重要な課題となっている事を学んだ。また、近年の気候変動が、単に温暖化という気温上昇だけでなく、雨の降り方や風の吹き方にも影響を及ぼし、大量の雨が短時間に降る事で、洪水被害をもたらしたり、逆に雨が全く降らなくなった地域では、農作物への被害から人々の生活が困窮したりと、水を起因とする多くの問題をもたらしている事も知った。つまり、それは水の量⇨安全な水の供給という公式が成立するほど単純な世界ではないということだ。

私の祖父は長年、行政で水道事業に従事し、定年退職した今でも、安全で十分な量の水を市民に届ける使命を誇らしく語り、家の水が一番お

いしいと言っている。私も全く同感だ。しかし、そんな祖父が子供の頃は、大雨で川が氾濫し家が浸水したり、汚水による伝染病が流行ったりしたこともあったそうだ。それが戦後、日本の産業の急成長と共に、上下水道に関する法律が整備され、厳しい水質審査基準を満たす技術が発展し、これを安定的に維持する社会のシステムが整い、今、ようやく私達は日本中どの蛇口をひねっても安心して飲み水として利用できるようになった長い歴史があったのだ。何十年もかけてダムを建設し、地下水を掘り出し、水を浄化し、全身をめぐらす血管の如く日本中の地中に水道管を張り巡らし、規則正しいメンテナンスする為のお金が膨大であることは想像に難くない。こうした社会の仕組みを構築する技術やお金を負担できないことが、水資源に恵まれながら安全な水を供給できない国々の課題ではないだろうか。

毎年五月になると家の近所の浄水場が一般開放され、敷地内一杯に咲き誇るツツジ鑑賞に出かけるのがこの季節の我が家の恒例行事だ。鮮やかな花も見事だが、不純物がろ過され澄みきった貯水槽に、青空が鏡のように映し出される水面もまた言葉にしがたい感動がある。

今年も間もなくこの季節を迎えようとしている。上毛三山に降り注ぐ雪や雨は、天然のろ過装置である地中を通り、利根川や広瀬川から注がれる水質の良い地下水は、ここで最終浄化の行程を迎える。こんな豊かな水の街に生まれたことに感謝しつつ、飲み水の格差がもたらす諸外国の問題にも目を向け、自分が、そして日本が世界に貢献できることを考えてみたい。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水神様への感謝を現代に

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 亀岡 千愛

日本には八百万の神々といわれるように、非常に多くの神々がいる。例えば山神、火神、氏神、水神などである。

このように、古来から日本人は、身の回りのあらゆるものに神々が宿ると考え、自然をととても大切にしてきた。

私の家のお墓参りは半日がかりである。その場所に行くのにも車で数時間かかる上、そこからさらに山道を登っていかなければならない。やっつとご先祖様のお墓について、頭を下げて、これで終わりではない。さらに、山の中腹にある山神様、その奥にある大きな湖のほとりにある水神様、山のふもとの地神様と氏神様など、たくさん神様のほこらに榊をあげ、頭を下げていく。

小さい頃は どうしてこんなにたくさん山道を歩いてたくさん頭を下げなければいけないのか、お墓参りに行くときは、いつも不思議に思っていた。

また、もう一つ不思議なものがあつた。それは山の中腹にある大きな湖だ。カルデラ湖でもあるまいし、なぜこんなところに湖があるのだろうと思ひ祖父に尋ねたことがあつた。

水神様のすぐ横にある湖、それはご先祖様が村の人々と共に力を合わせ、山のふもとの田畑に水を供給できるように人工的に造つた「ため池」だという。

そう教えてくれた祖父の後についていくと、水神様の横にあるため池にはたしかに、人工的に造つたとわかる水門やふもとの村へつながる水路などが木々にかくれてひっそりと存在していた。

自然を生かし、豊富な山の湧き水を上手に山の中腹のため池にたまるよう設計し、さらにそこから山の傾斜を利用してふもとの田畑に分配するという昔の人々の知恵に、私はとても感動したことを覚えている。

日照りが続いた時でもそのため池があつたおかげで、村では米づくり

ができたのだという。

いつもは、鳥が羽を休めに来るような静かな湖のようだが、実は村の人々の生活を支える大切な「水源」だったと知り、驚きと共にとても感動した。

すると、おのずと水神様に頭を下げる理由もわかつてきた。

水の恵みのおかげで木が育つ。米が育つ。野菜が育つ。魚が育つ。そして、その木で家を建て、米や野菜や魚を食べて人が育つてゆく。

川となり、海となり、霧となり、雲となり、雨となり、水となり、姿を変え、形を変えながらあらゆる物を生かし育てる水。

だから水を神様としてあがめ、感謝するのだろう。

このように、昔から日本人は自然のあらゆる恵みに感謝する心を持ち、たくさん神々をあがめてきたのだ。

ところが今の日本では、そんな考え方がうすれ、自然の恵みに感謝するどころか、水道の蛇口をひねればきれいな水がいくらでも出てくるというのが「あたりまえ」になっているように思う。

しかし、その「あたりまえ」は、自然災害などがあればいとも簡単にくずれ去る。あたり前の物が有り難いものへと変わったとき、人はやっつと自然のおそろしさとともに、ありがたさを実感するのかもしれない。未曾有の災害が相次ぐ今の日本、そんな今だからこそ私たちは、私たちの生命の源でもある「水」に感謝する心を取り戻さなければならないと思う。

私たちに計り知れない恵みをもたらしてくれている豊かな水資源に感謝し、大切にしていきたいことが、私たちや、後世の人々の豊かな生活につながっていくのだと思う。

経済産業大臣賞（優秀賞）

「世界水の日」について気づいたこと 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 丸山 佳大

「三月二十二日は世界水の日」新聞で、僕は初めて知った。水資源の開発・保全に関し普及・啓発を行うことを目的とし国連総会で定められたものだ。エチオピアでは、一人につきわずか五リットルの水を得るために、子供が炎天下の砂漠を毎日八時間かけて給水場まで歩かなければならない。しかもその水は茶色である、と新聞のコラムは伝えていた。日本では、家庭や公共施設、飲食店などどこでも蛇口から当たり前のように清潔な水が出てくる。「このきれいな水はどのようにして全国にいきわたっているのだろうか？」僕は水の供給とダムとの関係について興味を持ち春休みを利用して八ッ場ダムに見学に行くこととした。八ッ場ダムは現在建設中であり、今年度末に完成予定だ。実際にダムを近くで見ると壮観で、スケールの大きさに驚くとともに、見学者が多かったことにも驚いた。

八ッ場ダムは、利根川水系の代表的な支川である吾妻川の中流の長野原町に建設中の多目的ダムである。その役割の一つ目は、水道水の安定供給である。水源として予定している区域は群馬、東京、埼玉、千葉、茨城と広範囲にわたり、利根川上流の唯一の貯水施設としての役割を担うこととなる。利根川上流の降水量は、少雨の影響により降水量が減少傾向にあり、渇水による取水制限が実施され僕も経験したことがあるが、水が自由に使えないことはこんなにも不便なのかと思った。ダムにより水の需要に対応できる供給ができることで、とても安心して生活できる。二つ目は、利根川の治水対策である。大雨で川が増水したとき、大量の水をダムに貯水し下流への放流量を調整して河川の氾濫を防ぐ洪水調整機能を担っている。一昨年豪雨により川の堤防が決壊することがあったが、ダムにより群馬県や利根川下流部の広範囲にわたり洪水被害が軽減される。三つ目は発電機能で、ダム下流に新設される八ッ場発電所において発電が行われる。

このように僕たちの生活に役立つダムであるが、一方で、八ッ場ダム建設に至るまでには、そこに暮らす人々の様々な苦悩の歴史があった。昭和二十七年にダム建設の計画当初住民の人々は、首都圏の人たちのために故郷が水没するとし、ダム建設に強く反対した。その後の話合いで住民の人たちの苦渋の選択により建設が始まった。ダム建設により移転をする家屋は四百七十世帯にのぼる。ダム建設の計画から六十七年もの長い年月、様々な問題があり、それを乗り越えてきた人々の苦勞を忘れてはならないと思う。県や長野原町では現在、水没してしまう地域の生活再建事業にとっても力を入れている。

国連は二〇三〇年までに「安全な水とトイレを世界中に」を目標に掲げた。容易に安全な水を飲むことができれば、健康が維持でき、また下水道整備によりトイレが普及することで人々の生活の向上や経済発展に繋がる。そのためには、僕は、水やトイレが十分でない世界の地域に、日本のダムや浄水場といった利水、治水などの技術をもっともつと生かすことができなにかと考える。世界中にきれいな水とトイレを供給することに貢献できれば素晴らしいことだと思う。

「世界水の日」は僕にとって水の大切さを知るともよいきっかけとなった。僕の住む市に送水している県央第二水道では、群馬用水赤城幹線から水を取り入れ、浄水処理を行い水道水をつくっている。その後受水施設を経てようやく家庭に水がいく。

日本では、どこでも安全な水があり、トイレがあることは本当に幸せなことだと思う。僕は大自然の恵みと人々の英知、そして人々の多大な苦勞により、毎日安全でおいしい水を飲んだり使えたりできることに感謝し、水を無駄使いせず大切に使うと強く思った。

国土交通大臣賞（優秀賞）

ともに未来を望みて

神奈川県 横浜市立汐見台中学校 二年 柳川 心菜

手を洗うとき、米を炊くとき、お風呂に入るとき。私は当たり前のように、毎日水を使っています。蛇口をひねれば、いつでもきれいな水が出てきます。でも、このきれいな水はどこからくるのでしょうか。ダム。今までの私にとって、身近に感じたことはあまりありませんでした。でも、このダムが、実は私たちにとって、とても身近で重要な存在だったのです。

ダムを造るには、とても広い土地が必要です。そのためには、そこに住んでいた人々が移動しなくてはならないこともあります。私がお世話になっている宮ヶ瀬ダムの場合、一九七七年、もともとあった村はダム湖となり、そこに住んでいた一三六人の人々は他の町への移動を求められました。私がその村に住んでいたらどう思うのでしょうか。ダムのために、自分の家とも、楽しかった学校とも、仲の良かった近所の人とも、みんな『さよなら』です。そんなこと、嫌に決まっています。しかし、実際にそのようにして、ダムのために住んでいた場所から移動せざるを得なかった人々がたくさんいるのです。自分たちがもともと住んでいた場所が水の下に沈んでしまったと思うと、とても辛いでしょう。

少し前に、こんなニュースを見ました。宮ヶ瀬ダムの水位が減って、湖の下に沈んでいたガードレールや車の標識などが見えたそうです。インターネットで画像を見てみたところ、なんだかとても悲しく、切なくなりました。決して私が住んでいたわけではありません。しかし、胸がギュッと締めつけられるような複雑な気持ちになりました。

宮ヶ瀬ダムには、湖に沈んだ村に住んでいた人々のために、当時の神奈川県知事、長洲一二さんが贈った言葉が書かれた『望郷の碑』があります。

愛しき宮ヶ瀬の里
静かに湖底に眠る

ともに未来を望みて

湖岸に立つ

神奈川県知事だつて、ダムを作ってくれた方々だつて、村に住んでいた人々を困らせたかったわけではありません。絶対に『望郷の碑』にも書かれていたように、神奈川県を望んで造られたのです。村が湖に沈むことが決まったとき、ダム造りの計画に携わった方々もとても辛かったです。

ただ、その村に住んでいた人々、宮ヶ瀬ダム造りを計画してくれた方々、工事をしてくれた方々、それらの人々のおかげで今の私たちの住む神奈川県の水が守られていることは事実です。大雨のときには一時的に水を貯留し、中津川流域や相模川下流で暮らす人々のいのち・財産を守り、河川の流量を維持し、流域の生態系を守り、私の住む横浜市を含む十六市五町に水道原水を供給し、神奈川県に住む多くの人々の水道水を守っています。さらには、発電までしています。だから私たちは、蛇口をひねればいつでもきれいな水が使えるのです。

私は今まで、このような人の気持ちなど考えたことがありませんでした。みなさんはどうですか。このような人々がいることをしっかりと理解しながら水を使っていましたか。これまでの私は、水を大切にと言われて真っ先に思いつくのは水道代のことでした。でも、今は違います。ダムのためにこれだけ辛い思いをした人がいることを知り、その人たちのことも考えながら、水を大切に使うように思えるようになりました。

明るい未来を望んで造られた宮ヶ瀬ダムのおかげで、今日も私はきれいな水を使うことができます。宮ヶ瀬ダム、ありがとう。

環境大臣賞（優秀賞）

ふるさとの水物語

熊本県

熊本大学教育学部附属中学校

一年

樋口

頌子

私達家族は今年四月、富山から熊本に引っ越してきました。十一年間過ごした富山は家から立山連峰が一望でき、そこからの雪どけ水で水道をひねればいつでもおいしい水が飲めます。そのおいしい水で炊きあげたご飯と富山湾で獲れた魚の食事は私の好物であり、また私をここまで育ててくれた命の源でした。

新生活は水のイメージとは正反対の「火の国」熊本。私はおいしい水がまた飲めるのか心配でした。

しかし、実際飲んでみると、熊本の水はとてもおいしいのです。そこで私はこのおいしさはどこからくるのか興味を持ち調べてみました。

熊本の水道水は阿蘇西麓から川へ流れ、森や田畑から地下へ浸透し、バランスよくミネラル分や炭酸分を溶かし込んでおいしい地下水となります。熊本市はその水道水のおぼすべてを地下水でまかなっており、これは世界的にもめずらしいことだそうです。私はこの水のおかげで思ったよりすんなりと熊本になじむことができました。そして、現在九十九パーセントの水道普及率の日本でもどこでも蛇口をひねれば安全な水が飲めるのだと改めて気づかされました。

水について調べていくうちに、富山と熊本の水に関する悲しい過去の共通点を見つけました。それは公害です。

富山の神通川上流の鉱山から排出されたカドミウムにより汚染された川水や農地に実った米などを通じて多くの人々が苦しめられたのがイタイタイ病です。富山では小学校での授業だけでなく資料館を訪れたりしてこの病について詳しく学びました。

熊本にも同じく水の汚染により苦しめられた過去がありました。水俣病です。これは、チソン工場から海に流れ出たメチル水銀が海にいる魚や貝などに入り、それを食べるにより引き起こされた病です。

二つの病はいずれも日本の四大公害の一つとなり、経済成長と引きか

えに大きな犠牲を払った教訓として二度と同じ過ちを繰り返すことのないよう語り継がれています。

私は富山で忘れられない水の風景があります。それは黒部ダムです。日本の急速な経済復興に伴う関西の深刻な電力不足解消のため造られた黒部ダムは、その建造を大量の水と土砂に苦しめられ、七年の歳月、延べ一千万人の人手そして一七一名の犠牲により完成しました。その歴史を知った上で訪れた黒部ダムを自分の目で見たとき、私はその壮大な姿に圧倒されました。ダムの放水は日本一の落差で、落水からあがるひんやりした水煙とゴーツというお腹に響くような音に包まれます。六十年代前、多くの苦勞と犠牲を強いた水は今、人々の生活を支え、日本を代表する観光スポットとなり、感動を与える存在となっています。そしてこの黒部ダムの風景は私にとって忘れられないふるさと富山の思い出として心にずっと刻まれています。

きっと日本全国、どこでも私たち人間と水にまつわる歴史・物語があって、昔から人間はそれぞれのふるさとで工夫し、苦勞し、水と共に生きてきたのです。ふるさとの水の歴史を学ぶことはふるさとそのものを知ることになるのだと思います。

これから私はここ熊本の水について学び、熊本の素晴らしい水の風景を見ていきたいと思います。わたしのふるさととなる熊本についてもっと知りたいと思います。そして先人たちが作りあげた水の物語を守り、また未来に語り継いでいかなくはなりません。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

水の二面性

佐賀県

佐賀大学教育学部附属中学校

二年

北村 竜清

六月二十八日、朝から大雨が降り続いていた。家の裏にあるクリークの水があふれて、畑に浸水しそうになっていた。夕方、両親の帰りが遅くて心配していた。やっと帰宅した母が、こう言った。

「あちらこちらで冠水していて、自動車の中まで水が入りそうで、怖かった。家に帰れなかったらどうしようかと思っていたよ。」

しばらくして父も帰宅し、僕は安心した。テレビをつけると、大雨・洪水特別警報が発令され、隣町には、避難指示が出ていた。その晩、不安でなかなか寝付けなかった。

その後、連日のように西日本を中心とした各地での大雨の被害が報道されていた。気象庁は、この大雨を「平成三十年七月豪雨」と命名したそうだ。その被害の状況は、総務省消防庁によると、七月三十一日現在、死者二百二十人、行方不明者十人、全壊の住宅五千二百三十六棟、半壊の住宅五千七百九十棟などであり、「平成最悪の水害」と報道するニュース番組もあった。僕にとっても、水の脅威をこんなに身近に感じた経験は初めてだった。

一方で、水は人にとって必要不可欠なものである。飲料水、料理、風呂、トイレなど、あらゆる生活の場面で水を使っている。

そして今年の夏、僕は新たな水の使い方を学ぶことができた。

僕は先日、佐賀市の交流事業で沖縄県の久米島に行った。久米島の中学一年生と一緒に浜に行ったが、海の底が見え、魚の泳いでいる様子も観察できるほど不純物が少なく、透明度の高い海水だった。そんなにきれいな海に入ったのは初めてだった。あるテレビ番組で日本一美しい海として紹介されていたのも、納得だ。そんな美しい久米島の海水を利用した「海洋温度差発電」という新しい水の使い方を、僕は初めて知った。

この発電は、水深二百メートル以下の海洋深層水と、浅い所の海水の

温度差を利用したものだ。久米島では、水深六百十二メートルあたりのところから汲み上げられた海洋深層水を使っており、汲み上げ量が突出して日本一である。世界では、ハワイに次いで二位だ。発電に使った海水は、まだ十分に冷たいので、その冷たさを利用してクルマエビや海ブドウ、野菜を作ったり、冷房に使ったりすることができるとだ。また、きれいさを利用して、飲み水や化粧品を作るなど、いろいろなことに利用できる、それを「複合利用」と呼ぶそうだ。

そして、何と、この海洋温度差発電の研究・開発に携わっているのが、僕の地元、佐賀県にある佐賀大学海洋エネルギー研究センターだということを知り、僕はこの佐賀県をほこりに思い、久米島から帰ってきた。

僕にとってこの夏は、水の脅威と水の便利さという水の二面性を体験する貴重なものであった。僕は、今の当たり前を送ることができる生活に日々感謝しながら、水と共に生きていこうと思う。そのために、僕は何かできるだろうか。まずは、大雨・洪水に備え、佐賀市の内水ハザードマップを見て、どこが危険でどこが安全なのか理解し、家族で避難する場所を決めることから始めたい。そして、日頃からシャワーや蛇口の水の出しっ放しをなくしたり、歯みがきで口をすすぐ時のコップに入れる水を最小限に抑えたりして節水をしたい。

さらに、今まだ研究段階の海洋温度差発電についてもっと調べて、調べたことをたくさんの人に伝えたい。この発電に興味をもつ人が出てくると、研究者・開発者が増え、現在二百五十家族分の発電がさらに増えるだろう。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水という存在

インドネシア共和国 ジャカルタ日本人学校 二年 木下 結花

私は生まれてから日本を離れて、海外で過ごし、今はインドネシアで暮らしています。日本には年に数回帰りますが、私は日本に帰るときに色々なところで日本の素晴らしさを感じます。

その中でも特に私が「日本ってすごい」と感じるのは、水を自由に使えるということです。どういうことかというところ、水道の蛇口をひねったらきれいな水が出てきてそれを飲むことができたり、料理に使ったりできることです。日本でずっと暮らしている人にとってはそれが当たり前で、日常なのかもしれません。ですが、私が今暮らしているインドネシアでは絶対にありえないことです。なぜなら私は小さい頃から、「水道から出てきた水は飲むではいけない。もし飲むのなら、ペットボトルの水を飲みなさい。」と、教えられてきたからです。私にとってはこれが日常なのです。だから、日本に帰ってきて祖母が料理に水道水を使ったり、いとこが水道水を飲んでいるのを見て驚きました。

また、私の祖父は畑をもっています。私が畑に手伝いに行ったときに、祖父は近くにある湧き水を野菜にあげていました。私はジョーロやバケツに水をくんだときに、湧き水がとてもきれいだったのを覚えていました。その湧き水には、ザリガニや魚がいました。そして、その湧き水で手を洗ったり、野菜を洗って食べたりのもしました。私にとっては信じられないことばかりです。インドネシアの川は、臭いし濁っています。だから、とてもじゃないけどそこで手を洗ったり、ましてその水で洗った野菜を食べるなんて考えられません。

私はこんな風に日本の水の当たり前とインドネシアの水の当たり前の違いを実感するたびに、インドネシアでも日本のように自由に水を使う事ができたなら、今よりもずっと便利で楽しい生活待っていると思います。

では、どうしたら私が暮らしているインドネシアでも水を自由に使える

ようになるのでしょうか。私はインドネシアと日本では自然を美しく保つという事に対して意識の差があると思います。自然を美しく保つという事が最終的には美しい水を保つという事につながっているのだと思います。日本では道端や、山や川でもいたるところでポイ捨て禁止という看板をよく目にします。また、捨てられていけばボランティアの人々がきれいに保つためにゴミ拾いをしているのをテレビなどで見て、日本ではゴミを捨てないのはもちろんだけれど、捨てられていけばそのまま放置しておかずに自発的に行動に移すことが出来る人が多くいるということに感動しました。

私は日本のように社会全体で自然を美しく保とうとする動きがインドネシアに限らず、世界中で広まっていけば良いと思います。

海外で過ごし、水自由に使えない不便さを知っている私だからこそ、自分から進んで環境保護に貢献できるような人間になりたいと強く思います。まずは自分から、自然にゴミを捨てたり自然を破壊したりしないことは当たり前ですが、ボランティアに参加したり、植林活動に参加するなどの地域活動だけでなく、食べ残しをしない、エコバックで買い物をする、リサイクル品を使用するといった個人の活動も無限にあると思います。

私ひとりの活動では大きな変化は生まれませんが、まずはインドネシアのジャカルタ日本人学校でこの考えを一人でも多くの人達に理解してもらえる様にしたいです。そしてその考えが世界中に広まり、ひとつでも多くの国や地域で美しい水を自由に使えるようになれば良いと思います。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

人災を封じ災害を防ぐ

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 二年 真野 聡真

ある日、ふとテレビを見たら、愛知県知多市にある佐布里池のトップックスが放送されていた。その内容は驚くべきものだった。なんと、大きな調整池の水を全て抜くというもの。私はその番組を見て一体どういう意味なのかと好奇心に後押しされてすぐに佐布里池を訪れた。到着するやいなや、池の水位が低くなっていることに気がついた。写真と比べるとその差は歴然である。池のほとりを歩いていると、一つ疑問が浮かんで来た。

「何故この広大な池の水を抜くのか」

近くにある資料館の職員の方に尋ねると、どうやら堤体の補強工事の為だという。又、その資料館には、愛知用水の建設に関わり佐布里池の建設にも携わった男性が来館されており、その方曰く、

「元々この場所は池の建設に適しておらず、避けるべきだと言ったが、そのまま工事が進んでいった」

という。自然災害が急増している昨今、耐震性や強度を見直し、池周辺や下流の人々が安全に暮らす為に改良を続けていかなければならない。又これらは池やダムだけではなく、街の施設や各家庭でも重要なことであると感した。

そんなことを思っている矢先に、私は驚愕のニュースを目にした。ブラジル南東部のミナスジェライス州の鉦山用ダムが決壊し、死者・行方不明者あわせて三百五十人を超える痛ましい事件だ。これは、地震や豪雨などの自然災害によるものではない。管理会社が決壊の危険があることを知りながら対応をしなかったという。又、決壊時に周囲に避難を促すサイレンも、一切作動しなかったという。防ぐこともできたであろうこの事件によって多くの尊い命が奪われ、老若男女の夢が瞬く間に消し去られたことに、憤りを感じた。この事例と前述の佐布里池を照らし合わせると、佐布里池の補強工事がいかに重要であるかが手に取る様に分

かる。私はこの事件を教訓として、一刻も早く世界各国で同状況のダムやため池の整備がされ、「人災」によって失われる命を一人でも多く守ることの取組がなされることを切に願う。

「人災」は防ぐことはできても、「自然災害」は、完全に防ぐことは困難である。だが、それに備えることはできる。二年前、九州北部豪雨が発生した。連日メディアで放送される映像は普段私達があらゆる所で使っている水が突然と姿を変え、容赦なく街を襲い人々を飲み込む化物へと豹変したのだ。そんな中、福岡県朝倉市にある寺内ダムは洪水を貯水し大量の土砂や流木が下流への流出を防ぎ、被害の拡大を食い止めた。これは、備えが功を奏し、多くの命を救ったのだ。しかし翌年、台風七号によって起きた、西日本豪雨では、愛媛県西予市などのダムで、想定を遥かに上回る雨量により安全基準の六倍という異例の洪水が下流へ流された。又、住民への避難を促すスピーカーが異常な降雨の為聞こえなかったという。これらにより、九人の命が奪われた。ダムは、あらゆる「想定外」を考慮し、建設されているが、今回その想定を上回る雨量により人々の命を奪う事態となった。今回を教訓とし、様々な事態に対応するキャパシティを広げ、同じことを繰り返さない様に次代に引き継いでほしいと感じる。

前述の如く、私達が生きる為に必要であり、日々当たり前のように使っている水は、時として、人の命を瞬く間に奪う。そんな水がもたらす水害に対応する為、私達ができることは、水について知ること。いつ起きるか分からない災害に各家庭で万全の備えをし、様々な想定で家庭や友人と話し合う。このような一人一人の意識によって、自然災害が無くなること、災害が起きた時に多くの人が救われることを、心より願う。

中央審査会特別賞（優秀賞）

水と共に生きる

岩手県 陸前高田市立高田第一中学校 二年 小野寺 麻緒

あの日、私は初めて水の怖さを知った。東日本大震災が起きたのは、今から八年前。当時、私は五歳だったが、その時のことは、今でも鮮やかに覚えている。

私はあの時、中学校の体育館に避難した。避難所で一番先に配られたのは紙コップ半分の水。ほんのわずかな量であったが、嬉しかった。しかし、水は不足し、トイレの水は流れず、お風呂に入ることなんて考えられない日々であった。私は、「海なんて無くなればいい、津波なんて来なければよかったのに」と何度も思った。地震は、私たちの大切な街を、人々の笑顔を、そして、たくさんの思い出を奪っていった。私は幼いながらも本当の悲しみを感じた。

数日して私たち家族は、山沿いにある祖父母の家に避難した。そこで、私は陽の光を集めてキラキラ光る沢の水にはっとして思わず息をのんだ。私はいてもたつてもいられず、一目散に走って行き、水をすくうと一気に飲んだ。ゴクゴクと音を立て、冷たい水は私の喉を流れていった。味のしない水がこんなにもおいしいなんて思ってもみないことだった。

小学生になると、私は体育の授業が不安だった。水が怖くて、プールに入るのがとても嫌だったのだ。「おぼれたらどうしよう、沈んでしまつたらどうしよう。」といつも考えてしまふのだった。けれども、プールの水面に映る輝きは、あの山の沢のきらめきにも似ていて、喉の渴きをうるおした水の記憶と重なり、私の恐怖心は徐々に薄れていった。

海が嫌いで、海なんかなくなればいいと思っていた私だったが、中学生になると次第に私の気持ちは変化し、「この海とともに生きていくためにはどうしていったらいいのだろう」と考え始めていたのだった。そんな時、父から「防災についてもっと知りたくないか」と誘われ、市で行われている『防災マイスター養成講座』に父と姉との三人で通うことになった。たくさんの大人に交じって話を聞くことは少し難しかったが、

洪水や土砂崩れなど水害の学習や避難生活の食事、地域での避難訓練の大切さなどを改めて学ぶことができた。十二講座の中でも特に、靴の代わりに新聞紙でスリッパを作ることや火を使わずに水だけで調理ができる食品のことがとても印象に残った。災害から身を守るための知識がないと、自分を守れないことも初めて知った。最後にテストを終えて、私はマイスターの認定を受けることができた。そして、その学びを同じ学年の仲間の前で発表する機会に恵まれ、避難所運営に役立つ情報を伝えることもできた。災害時に長持ちする食品や賞味期限の優先順位をつけるというローリングストックの話をみんなはとても興味深く聞いてくれて、私もみんなの役に立てたことがとても嬉しかった。

人間の命を支える水は、時として、人の命も奪ってしまう怖いものにもなる。しかし、震災を経験した私たちにとって水はかけがえのない大切なものだ。

私は、水に囲まれたこの街が好きだ。好きだからこそ、海を怖がらず、水を怖がらず、次の世代にもこの街を好きになってほしいと願う。どんなに月日が過ぎても震災の悲しさや辛さは決して消えることはないけれど、私はこの街の復興を思い、これからの人達に防災活動を通して、水の怖さも豊かさも同時に伝えていきたい。そして、あのコップ一杯の水を差し出せる人になりたい。

キラキラとした故郷の水の美しさ。水を守り、街を守っていくことがこれからの私のできることだと思う。